

平成 28 年秋における外来魚生息状況調査結果

田口貴史・臼杵崇広・佐野聡哉

1. 目 的

平成 28 年秋季の外来魚（オオクチバス・ブルーギル、以下バス・ギル）当歳魚の生息（発生）状況を琵琶湖沿岸域での定点調査により把握する。

2. 方 法

平成 28 年 9 月 27 日から 11 月 4 日にかけて、琵琶湖沿岸域（水深 7m 以浅）の 116 定点（北湖 75 定点、南湖 41 定点）で調査を行った。調査は小型ビームトロール網（ビーム長 4m）を小型動力船で曳網（底曳網）することで実施した。曳網速度は 0.27m/秒を基準とし、北湖では 5 分間、南湖では 3 分間曳網した。採捕魚の測定結果から、バスでは標準体長 120 mm 未満、ギルでは北湖、南湖別にそれぞれ標準体長 60 mm、55mm 未満を当歳魚とし、その生息密度（曳網面積 1ha あたりの採捕尾数）を算出して、平成 19 年以降の結果と比較した。

3. 結 果

バス当歳魚の生息密度は北湖では 394.4 尾/ha（前年比 59.3%）に減少したが、南湖では 295.2 尾/ha（前年比 100.6%）で昨年とほぼ同様であった（図 1）。一方、ギル当歳魚の生息密度は北湖では昨年のおよそ半分の 819.5 尾/ha まで減少したが（前年比 45.1%、平成 26 年以前と同水準）、南湖では平成 24 年の大発生を上回る 35,809.1 尾/ha（前年比 599.4%）まで増加した（図 2）。

近年の琵琶湖南湖では、過去には見られなかったバス、ギル当歳魚の大発生が度々生じており、これらが平成 25 年以降の外来魚生息量増加の一因であると考えられることから、駆除の強化と合わせて、本年度発生した年級群の動向を注視することが必要と考えられる。

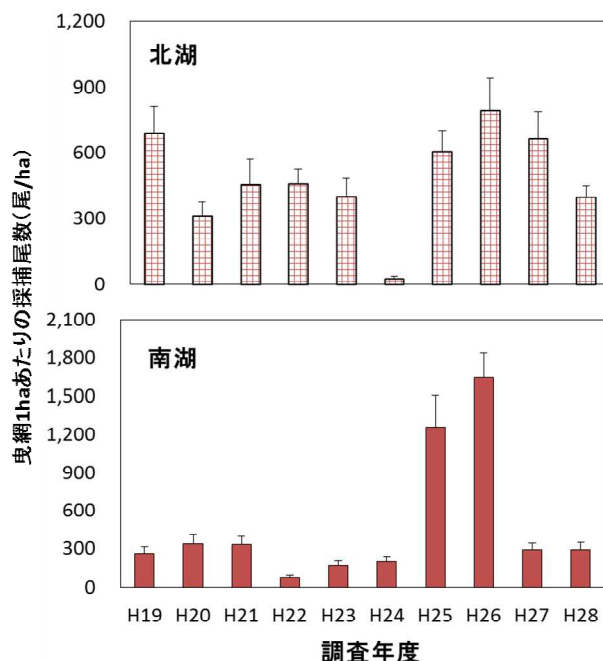


図 1 曳網 1ha あたりのオオクチバス当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

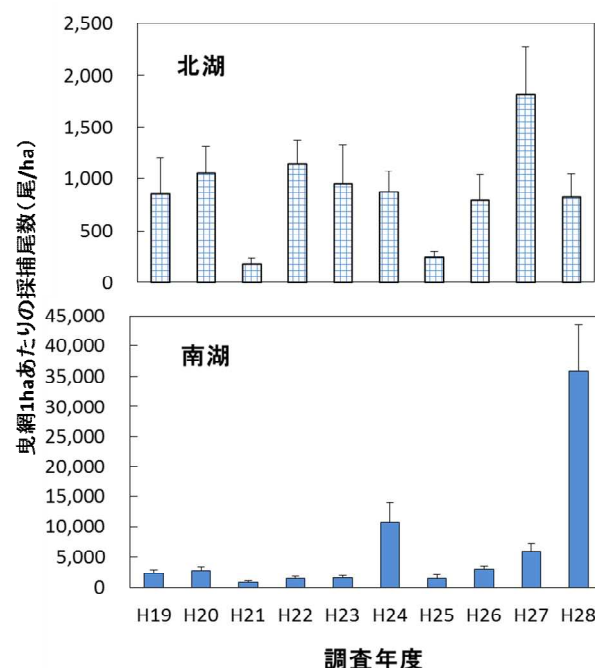


図 2 曳網 1ha あたりのブルーギル当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）